

アリストテレスの個体論

——『形而上学』における“個体化”について——

岩 村 岳 彦

【キーワード：①τόδες τει；②種的形相；③個的資料；④普遍的資料；
⑤定義】

『形而上学』の中で、個体はどのような性格のものとして記述されているか、個体が生成することとはどのような事態として捉えられているか、またその事態において個体は何によって個体としての性格をもたらされるとされているか、を考える。ただしこの主題を論ずる際、質料原理説と形相原理説の対立というアリストテレス解釈史上よく知られた図式は前提としていないことを始めに断っておきたい。“個体化 individuation”という用語の使用については、それがアリストテレス本人の持ち出した概念でない以上、できれば避けたかったのだが、あえて習慣に従い用いたまでである。このような言い方をしなければならぬのも、個体 τόδες τει の欧語訳の元となった *individuum* という言葉自体、それが適訳かどうか疑問を感じるからで、筆者は、そもそもアリストテレスの個体論をめぐる中世の解釈者たちの議論（あるいは現代の研究者のそれも）が不必要に複雑なものとなっているのは、この不適切な訳語が個体本来の性格を見えにくくした結果なのではないかと疑っているのである。

そのような訳で、この論文では一旦原文の表現に立ち返ってアリストテレスの个体論の内容を再考することを提案している。先取りして言うと、以下でまず个体 *τόδε τι* とは単独の *τόδε* : いわゆる *individuum* としての要素と、*τι* 何らかの普遍的性格 : *spécifique* な要素との結合した概念と捉えられる。つまり *τόδε τι* の形成には、(通常の意味、字義通りの) *individuation* と、*spécification* の、2つの働きが含まれていると考え、さらにこれらの働きには質料及び形相がそれぞれ関与すると理解する。従ってアリストテレスの考える个体 *τόδε τι* を成り立たせることをあらためて“*individuation*”ともし呼び直すのであれば、その“原理”は質料であるとも形相であるとも言われなければならない¹⁾。このことを確認し、実際にアリストテレスの議論の内に見出される、質料による个体化と形相による个体化という2つの異なる考え方が、そもそも両立し得ない矛盾の見解だと(かつての注釈家たちのように)考える必要は本来ないという解釈を提案する。

1. 資料と〈*individuation* : *particularisation*〉

形相と〈*spécification*〉

古くから指摘されてきた通り、『形而上学』には、質料による个体化と形相による个体化という2通りの解釈を可能にする記述が個別に存在する。始めにそれらを一瞥してみる。質料について触れた記述として分かり易いのは、

01. しかし「人」とか「馬」とか、その他このように個々のものについて言われるが、ただし普遍的な仕方と言われるものは、[第一の]実

体ではなく、普遍的なこれこれの説明と普遍的なこれこれの質料からなる、或る意味での結合体である。これに対し、個々の事物は、最も近い質料から現にソクラテスとなっている。その他についても同様である。(Metaph. Z, 10, 1035b27-)²⁾

「個々の事物」は、ここでは「最も近い質料」から成るものとされている。すなわちこれなる人間たるソクラテスは質料の働きによってソクラテスたらしめられている。では質料によって「すでにソクラテスとなっている」こととはどのような状況として説明されるであろうか。別の記述を見てみる。

02. 生じた全体とは、これこれの肉や骨における (*ἐν ταῖσδε ταῖς σαρκὶ καὶ ὀστέοις*) このような形相 (*τὸ τοιόνδε εἶδος*) であり、それがカリアスやソクラテスである。両者は質料の故に異なっている。というのは質料が異なっているからである。だが形相においては同じである。というのは形相は不可分だからである。(Z, 8, 1034a5-)

この記述では、ソクラテスは自らの直接の質料が他の人間のそれと異なることの故にその人間から区別されると考えられている。つまりソクラテスとして存在しているということは、「この」人間として他から区別され、限定された、指示可能な存在であることを意味している。従ってここで明言されているのは、種を同じくする者同士の間で数多化が行われる際の直接の原因が質料の個別性にあるということである。伝統的解釈がこれらの記述を根拠に、質料を“個体化の原理”と位置付けた際、“個体化”の意味するところが、事物に他から区別された「これ」としての個別性をもたら

す働きとして捉えられていたとすれば⁸⁾、それは解釈として間違っていない。個々の物は質料が区別されることによって数的に分けられ、かつまた質料が1つである限り事物は1つであると、すなわち個別的に限定されているとみなされるのである。

03. 数において1つといわれるのは、その質料が1つであるところのものであり、種・形相においていわれるのは、その説明が一つであるところのものである。(A, 6, 1016b32)

質料によって個体は他から区別された特殊な個別存在たらしめられるということが確認された。もし multiplication ないし particularisation の意味で“個体化”という用語を用いるならば、質料はその“原理”であると言われて差し支えない。

次に個体が形相によって作られるとする解釈に根拠を与えそうな箇所を挙げる。

04. それらの実体が1つであるようなものどもはすべて1つであるから。(B, 4, 999b21)

05. それらの実体すなわち本質が1つであるようなものどもは、それら自体1つだからである。(Z, 13, 1038b14)

06. 同じ種に属するものの〔原因や構成要素〕もまた異なるが、それは種においてではなく、個々の事物に属するものがそれぞれ異なるということにおいてである。たとえば君の質料と形相と君を動かすものが

私のそれらと異なるということにおいてである。ただそれらは普遍的説明においては同じであるが。(A, 5, 1071, a27-)

04 は 05 の言い換えと判断できるものとする。まずこの2つの記述が、形相の、ないし形相の説明である本質の同一性が事物の同一性を保証している事の指摘である点を確認したい。すなわちこの箇所では念頭に置かれている *οὐσία* i.e. 形相は「種的」形相と考えられなければならない。従ってこの2つの記述が形相による個体化を示唆するとみなすにしても、先に見た個別的質料による個別化と同じような意味で形相による個体の限定が行われる訳ではないことを認めなければならない。もし形相が個別化や数多化に直接関与すると仮定するならば、アリストテレスが種的形相とは別に個的形相の存在を想定していたと見なさなければならないことになる。06 は問題のある箇所だが、取り方次第ではこの仮定を補強しそうにも見える。つまりここでもし君の形相と私の形相とが「異なる」という状況が個別的な「異なる」質料との結合の結果として捉えられている⁴⁾と、あくまで解釈できないとするならば、この記述は極めて明瞭な言葉で個的形相の存在を主張したものと理解しなければならないことになる⁵⁾。だが少なくとも、そのように考えた場合、個的形相という概念の異質さそのものよりも、アリストテレス本人が自らの発言の重大さに気付いていないという事実⁶⁾の方がはるかに不可解だということは言えるであろう。06 に関しては、差し当たって個体の形成に形相が関与することの説明として不十分だとみなしてよいように思われる。

さて種的形相によって事物が同一性を得ることが認められた。ソクラテスやカリ阿斯は種的形相によって限定されていることではじめて「人間である」と言われ得る。そして個々のこれなる人間が人間としての同一性を

保つ事ができるのは「人間＝二本足の動物」という言表が一つの定義をなすという事実の故にである。こうした、言表による同一性の保証という考え方は既に見た 03 の中でも提示されていた。また I 巻の次の記述も同様の脈絡で捉えられるであろう。

07. ある仕方では、数において同じであるとしばしば我々は言う。また別の仕方では、説明においても数においても 1 つであるような場合に同じであると言う。たとえば、君が君自身と、形相においても質料においても 1 つであるという場合のように。(I, 3, 1054a33-)

つまり形相は個体に種としての性格を付与し、それが普遍的な言表・説明を通じて認識されることを可能にする役割を果たす。そしてそのような役割で個体の形成に関与すると見るならば、確かに形相は“個体化”に関与していると言える。この者がソクラテスであるという現実、彼が人間であるという事実と別個に成立している訳ではないからである。

これまでに見てきたことから言えるのは、個体のもつ二面性、すなわち個的に指示される個物とそれについて普遍的に言われる種、という側面の相違を前提にアリストテレスの個体論の 2 つの視点を理解しなければならないということである。質料は前者の性格をもたらし (字義通りの *individuation*, 「これ」という個的限定の付与: <particularisation>), 形相は後者の性格を保証する (種化<spécification>)。

だが重要なのはむしろ今述べた 2 つの側面はあくまで 1 つの個体の側面としてしか意味を持ち得ないということである。形相はこの「人間」を作ることによってのみ形相として存在し得る。ソクラテスに内在する普遍的人間は、思考上ソクラテスから分離するものであっても、現実には具体的

な質料と結びついてソクラテスの形成に関わることによってしか存在し得ず、その意味で個体と不可分である⁷⁾。他方「人間である」と言われ得ないソクラテス、つまり指示によってしか把握できない個体について思考することもできない。アリストテレスが以下のように述べる時、おそらくこの事実が自明のこととして認識されていたはずである。

08. …だが〔形相は〕「このような」を示すものであり (*τὸ τοιόνδε σημαίνει*)、これ (*τόδε*) すなわち限定されたものではないのである。むしろ作ったり産んだりというのは、「これ」から「このような」を (*ἐκ τοῦδε τοιόνδε*)、という仕方ではされるのであって、生まれた時点で、そのものが「このようなこれ」(*τόδε τοιόνδε*) なのではないか？ (Z, 8, 1033b21-)

生成する個体とは単に「これ」(*τόδε*) と指し示されただけのものでもなければ、認識された「このような」(*τοιόνδε*) 性格として抽象されたものでもなく、その内容は常に両者の結合として、つまり「このようなこれ」(*τόδε τοιόνδε*) として表示されなければならない事をアリストテレスは強調する。すなわち個体 (*τόδε τι*) とは「これなる」+「このような普遍的性格：形相」(cf. *τὸ τοιόνδε σημαίνει*) の結びつきによって初めて実体としての同一性を保証されるものであり、両者が離れてあることは少なくとも現実にはあり得ない。その意味で、質料によって「これなる人間」であることと形相によって「これなる人間」であることとは、共に相即し、一つの事態をなしているのである⁸⁾。従って君が同一性を質料によって保持していることと形相によって保持していることとは、君が個体であるという1つの事実の両側面だった訳である (→07)。

こうしてアリストテレスの記述から、ある個体 $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ に同一性を与えるためには質料と形相の双方が同時に要求されると解釈すべきことが認められた。確認すれば個的質料と種的形相の双方がである。

2. 個的資料は、それ自身実体として、 $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ と呼ばれ得る。すなわち、ある個体は他の個体から生成する。

種的形相の個体化への関与については既に整理された。形相は個体に「何であるか」つまり「説明・定義」可能な特定の性格を与えるものであり、その可認識性を保証するものである。実際の説明の場面では、それは個体の普遍的本質として自ら「言及される」。

09. …形相が、または形相を有する限りのものが、これこれ ($\epsilon\kappa\alpha\sigma\tau\omicron\nu$) と言われるべきである ($\lambda\epsilon\kappa\tau\acute{\epsilon}\omicron\nu$)。質料的〔部分〕の方は、それ自体では決してそのように言われるべきでない。(Z, 10, 1035a7-)

以下では、それ自体は「言及・説明」され得ず、「これ」として指し示されるだけのものとされる、個体の「質料的部分」についてより詳細な検討を加える。とりわけ、質料がどのようにして個体にく被指示性：これ ($\tau\acute{o}\delta\epsilon$) であること>を付与するのかを明らかにするのに役立つ記述に注意を払っていく。

さて、個体化に関与する質料すなわち個別化の質料は、個体に「最も近い」具体的に指定された質料 $\epsilon\sigma\chi\acute{\alpha}\tau\eta\ \acute{\upsilon}\lambda\eta$, e.g. $\tau\alpha\iota\sigma\delta\epsilon\ \tau\alpha\iota\varsigma\ \sigma\alpha\rho\acute{\xi}\iota\ \kappa\alpha\iota\ \delta\alpha\sigma\tau\omicron\iota\varsigma$ として記述されていた (→02)。個別生成のための「この」質料と

されるものの位置付けについてまず探ってみる。次の引用はそのための最初の手掛かりを与えると思われる。これはアリストテレスが質料の存在論的な地位に直接言及した箇所である。

10. だが質料もまた実体であるということは明らかである。何故なら、対立するもの同士の間の変化には、いかなる場合においても、その変化の基に置かれた何かがあるからである。たとえば…変質においては、今は健康で今度は病気であるようなものがそれである。(H, 1, 1042a32-)

ここでは変化の基体としての質料が「実体」の資格をもつとの指摘がなされている。基体としての質料の実体性については、これに先立つ Z, 3 において既にそれを否認する結論が出されているのが認められるが⁹⁾、そこで検討の対象となっていたのは「主語」としての基体、正確には「自らは他の主語の述語とならないもの」という基体の規定条件から論理的に導かれる、属性を取り去られた果ての無規定的「究極」(τὸ ἔσχατον) としての質料概念である。確かにそのような基体〔質料〕の内に「離在性と個性」(τὸ χωριστὸν καὶ τὸδε τι)¹⁰⁾ という実体の条件は認め得ない。だが述語規定を受けるものは、その論理学的な立場以前に、自然学的な原則に従って存在するものとしての姿を持つ。ここに見るように、変化・変質の基体を想定した議論は、主語概念についてとは異なる結論を導くのである。どのような変化においても、その主体は現実的にある実体として変化を被る。そして変化の基体が事実であるという意味において質料がそれ自身実体と見なされることは「明らか」だと確認されるのである。実際、健康な人が病気になるという性質変化の場合、質料たる人自身は「個性」

の故に当然実体である。

もちろん、明らかなようにここで扱われているのはあくまで変化・変質の質料であり、この議論を、我々が考えようとしている個体の生成のための質料すなわち実体変化の質料について直接適用する訳にはいかない。では生成の質料の位置付けについて、アリストテレスは他の変化の質料について述べるのと同じ観点から、すなわち実体性の有無という観点から指摘を行っているだろうか。この点に関わる記述として、我々はすぐ後に続く次の文を重要視したい。

11. …同様に実体についての変化においても、今は生成の過程にあり、今度は消滅の過程にあるものが、すなわち今はこれなる何かとして変化の基に置かれているものが、今度は欠如的なものとして変化の基に置かれているものが、あるからである (*ὁ νῦν μὲν ἐν γενέσει πάλιν δ' ἐν φθορᾷ, καὶ νῦν μὲν ὑποκείμενον ὡς τότε τι πάλιν δ' ὑποκείμενον ὡς κατὰ στέρησιν*)。

この箇所についての構文解釈は通常、実体変化における2つの基体の具体的な説明がなされている後半部分の順序を入れ替えた訳を試みる Ross のそれに従うことになっている¹¹⁾。つまり Ross はここで2組の *μὲν…δέ* の対応を交差させ (*chiasmus*)、欠如態にある基体が生成の基体として、*τόδε τι* としての基体が消滅の基体として、説明されているものと理解する。生成完了以前には未だ形相が得られていないが故に基体は欠如態であり、これから消滅しようとする基体は既に自らの形相によって限定されたものとして存在している以上 *τόδε τι* である筈だからということである。この見解に従うとすれば、実体変化において質料が実体と見なされるの

は、それが生成の質料である場合ではなく、消滅の質料である場合だということになる。しかしながら、ここでの対比は *μὲν…δέ* がというよりも、*μὲν…δέ* によって強調された *οὐν…πάλλειν* という語句が極立たせているということに注意したい。このことを考える時、*chiasmus* の適用がたとえ修辭的に自然であるとされようと、それによって時間的指定の順序が逆転することには心理的抵抗を覚えるのである。

Gill は最近の著作の中で、従来とは逆の立場に立つ解釈を提案している¹²⁾。つまり *τόδε τι* といわれている基体は生成過程にあるものの方に対応し、むしろその意味での質料すなわち生成の質料の方をアリストテレスは実体と見なしているのではないかというものである。実際、たとえ修辭上の問題を抜きにしたとしても、通常 of の読みに従う限り、他の記述との内容的矛盾が生じてくることは避けられない。たとえば Gill も挙げる、H, 5 の記述によれば、「反自然的消滅」(*φθορὰν τὴν παρὰ φύσιν*) の質料を *τόδε τι* と見なすことはできないのである。アリストテレスは「酢」の生成すなわち「葡萄酒」の腐敗=消滅を例にとつてこのことを説明している¹³⁾。すなわち、確かに酢は葡萄酒から生ずるものではあるが、酢の質料を葡萄酒と考える事はできない。消滅の過程から生じたもの〔酢〕の質料は、消滅して行く実体〔葡萄酒〕それ自体ではなく、その実体がそこから生じたところの質料すなわち「水」だと考えなければならないというのである。つまり、水と、葡萄酒の形相とから生成した葡萄酒という結合体すなわち *τόδε τι* が形相を失うことによって酢は生ずる訳だが、その過程の質料は当初の結合体 *τόδε τι* ではなく、結合体の、形相を欠如した、質料的要素である水なのである。こうした見解は、Ross の期待に反して、消滅の基体を *τόδε τι* とみなす解釈の道を閉ざすものだと言わざるを得ない。むしろ逆に欠如的(*κατὰ στέρησιν*) 基体といわれたものの方がそれに

対応していると考えた方が議論は一貫するのである。そしてそのように考えるべきだとすると、生成の基体こそが *τόδε τι* であり、他の変化の場合と同様、生成という実体変化の場合においても質料は実体として位置付けられると、アリストテレスは言明していることになる。

個体の生成のための質料が実体として *τόδε τι* として捉えられているという解釈に、次の記述はさらに有益な示唆を与える。

12. あるものを“～デアル”という場合、そのものを「これこれ」(*τόδε*)とは言わず、「これこれの・でできた」(*ἐκείνινου*)と〔我々は言うであろう〕。たとえば「箱」のことを「木」(*ξύλου*)ではなく「木でできた」(*ξύλινου*)と、また「木」のことを「土」(*γῆς*)でなく「土でできた」(*γῆϊου*)と、さらに「土」ももし同様に言えるなら、「他の何か」でなく「その何かの」と。常にこれ〔らの各々〕は可能態における、後のものなのである。(Θ, 7, 1049a18)

ここではある生成以前の状況に遡って質料自身の生成を考え、質料のための質料の系列に言及しているのだが、その際上位の質料と下位の質料との関係は結合体とその直接の（「最も近い」）質料とのそれに等しいことに注意したい。つまり箱の質料：木も、その質料：土も、自らがより下位の質料から生成したものであるという限り、箱という結合体と同じ資格の存在だと見なされてよいのである。アリストテレスはさらに、この質料の系列の溯行の果てに予想される、もはや“*ἐκείνινου*”という言及すら不可能な、第一の質料 *πρώτη ὕλη*¹⁴⁾ の存在について触れ、それ自体は「これなる何かでも実体でもない」(*οὐ τόδε τι καὶ οὐσία*)¹⁵⁾ と述べる。これは逆に言えば、それより上位の質料はすべて自ら *τόδε τι* であり、かつ実体であ

るということである。すなわち「この箱」が、この木 (*τοδὶ τὸ ξύλον* 1049 a24) という質料と、箱の形相とから生成した *τόδε τι* であるのと同じ意味で、「この木」(*τοδὶ τὸ ξύλον*) 自体もまた、この土と、木の形相とからなる *τόδε τι* と見なされるものなのである。以下も同様な仕方でも語られることになる。

以上から、個的生成のための、指示された最接の質料 (e.g. *ταῖσδε ταῖς σαρκὶ καὶ ὀστέοις, τοδὶ τὸ ξύλον*) が、自らもまた指示と個有の形相とによる規定を既に受けた「これなる十何か」として：個体として、位置付けられていることが分かった。しかしもし質料がそのような地位にあるとすると、当然現実態における *τόδε τι* が考えられている筈である。このことは、質料とは可能的存在だとするアリストテレスの見解と矛盾しないだろうか？ しかも彼ははっきりと次のように述べているのである。

13. …質料という時私が意味するのは、現実態においてはこれなる何か (*τόδε τι*) でないが、可能態においてはこれなる何かであるようなものである。(H, 1, 1042a27)¹⁶⁾

もちろんこれは質料を語る際に生成の終局を視野に入れるか入れないかの違いを考えれば解消する疑問である。しかしそう結論する前に、我々は Z, 7 でなされる基体と欠如態についての注目すべき議論に触れておく必要がある。それは先に見た、質料的部分の呼ばれ方の問題 (→12) と関連する。つまり生成を語る際の言語的処理の問題である¹⁷⁾。

重要なのは、生成のための質料は、そこから生じた事物の質料的部分となった段階で、言及のされ方が変わるということである。つまり、青銅から生じた像の場合、その像は、青銅という質料の名では呼ばれずに、「青

銅の) (χαλκοῦς) という派生語で呼ばれなければならない。ところが他の変化 e.g. 性質変化の場合、たとえば病気から健康になった人は「人間」という変化の基体・質料の名で呼ばれて差し支えないのである。アリストテレスはこうした事情の違いを説明するのに、欠如態の概念を用いる。すなわち変化するものは本来「欠如態から」変化すると言われなければならないにもかかわらず (“「病 [人]」(κάρμνον) から「健康人」(ὁ ὑγιής) が生ずる”), 実体変化の場合、欠如態が「名を持たない」ために、質料がかわりに挙げられているのである (“「青銅」から「青銅の像」が生ずる”)。つまり本来の生成の起点 (ἐξ οὗ) はあくまで、“青銅における像の形相の欠如”であった筈だが、日常的な言語感覚が欠如態を純粋な基体・質料と同一視した結果、あたかも病人が健康といわれるようになるのと同様に、青銅の言及のされ方が変化してしまったのである。ἐξ οὗ は欠如から所持へ変化するものであり実体変化の場合、その変化は直接にはなく、“質料 Y→Y の・でできた”という質料的部分の記述の変更として、間接的に言語表現されるのだといえる。

14. …というのも、彫像が木からできているとか家が煉瓦からできているということも、よく考えてみれば、端的には言えないだろうから。何故なら、或るものから生ずる (からできている) という場合、この或るものは変化しなければならず、留まっていないからである。(Z, 7, 1033a19-)

ここで用いられた「欠如」の概念は、生成のための質料の語られ方について新たな理解をもたらしてくれる。まず本来の ἐξ οὗ ではないが言語上表面に表れる基体とは、欠如態から切り離された質料それ自体を意味して

いた。他方、本来の $\xi\sigma\ \omicron\theta$ においては欠如態にある質料が考えられていた（たとえば「型を欠いた・青銅」cf.「病・人」）。ここから同じ基体に認められる異なったあり方を捉えるための2つの観点が得られたことになる。すなわちある基体は、その一方からは、欠如態を含まない、従って生成する個体との関係を考えない質料そのものとして（我々はこれを〈狭義の基体〉としよう）、もう一方からは、個体のためにある質料、個体の生成を視野に入れた、従ってその形相がまだ得られていないことを念頭に置いた質料、つまり欠如態を含む質料として（これを〈素材の基体〉としよう）、それぞれ把握されるのである。

先に問題とした点すなわち、生成のための個的質料が、可能的にのみならず、現実的にも $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ と言われ得ることの意味は明らかになった。つまり生成の起点にある質料〈狭義の基体〉を取り出し、それを個有の形相と個有の質料とによって既に充足したものと見なす限り、それは欠如と無関係に、自身の形相の保持によって、現実態としての $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ と言われ得るのである。そして同じ質料を、やがて生成の終局に生ずるであろう、より上位の個体のために用いられる〈素材の基体〉として見れば、獲得すべき形相と未だ欠いているという側面のために、生成する個体の欠如態として可能態にある $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ としか言われ得ないということになる。質料が現実態においては $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ たり得ないと言われたのは無論この意味からだった訳である。両者は同じ質料である。だがそれは自ら個体として現実態にあり、可能態にある他の個体なのである（→12）。

3. 普遍的資料—〈個別化〉と〈種化〉を結ぶもの

この章では前章までに確認された事実に基づいて、実際の個体生成の場

で質料がどのようにして被指示性をもたらすのかを考える。その過程で、質料が或る普遍的な仕方では、本質・形相の成り立ちにも関わるものであったことが新たに明らかにされる。

上位の個体は、より下位の個体を質料として生ずる、という系列的な図式を我々は既に認めた。個体から個体が生ずる過程として個体化をとらえた時、その過程の内にどのような事態を見ることができであろうか。この木〔この質料〕からこの箱〔この結合体〕が生ずる過程を、個体 $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ から個体 $T\acute{o}\delta\epsilon\ T\iota$ が生ずる過程として見てみよう。まず、生成の起点において「この木」は自らこの結合体「この土+木の形相」として充足した実体であり、この時点で現実態にある $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ である。そしてこの〈狭義の基体〉が一般には生成 $\acute{\epsilon}\xi\ \omicron\upsilon$ とみなされることになる。一方「この木」は「この箱」 $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ のための〈素材の基体〉でもある。それは“形相 $\tau\iota$ の欠如態”を含んだ基体 $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota + \text{priv. de } T\iota$ であり、そのことによって可能態にある $T\acute{o}\delta\epsilon\ T\iota$ である、すなわち $T\acute{o}\delta\epsilon - \tau\iota$ 。生成の終局において欠如が所持となる時、それは現実的に $T\acute{o}\delta\epsilon\ T\iota$ 「この箱」となる。「この木」 $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ 以前の状況もこれと同様に溯られる。

さて、ここで $T\acute{o}\delta\epsilon\ T\iota$ を $T\acute{o}\delta\epsilon$ たらしめるために何が行われただろうか。まず生成は「これ」から「このような」を ($\acute{\epsilon}\kappa\ \tau\omicron\upsilon\delta\epsilon\ \tau\omicron\iota\acute{o}\nu\delta\epsilon$) を作り出す過程とされていた (→08)。「この箱」の「これ (であること)」は従って “ $\acute{\epsilon}\kappa\ T\omicron\upsilon\delta\epsilon$ ” という仕方で語られる筈である。実際それは “ $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ から” である。もちろん、生成の個的質料が直接個別化に関わることをこの図式は意味している。ところが問題となるのは $\tau\iota$ の行方である。すなわち「この箱」の「これ (であること) ($T\acute{o}\delta\epsilon$) を「この木」($\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$) がもたらした段階で、つまり $T\acute{o}\delta\epsilon$ となった段階で、「木」($\tau\iota$) はどうなったのか？ この木の木という性格は消失したのであろうか？ 実はそれは

<指示>ではなく、「説明・定義」の対象として、普遍的な仕方て姿を現すことになるのである。

H, 2 によれば、たとえば「家」の定義とは、「人や財産の容れもの」という「種差」と、「石、煉瓦、木」という質料の結合とされる。おそらくそれは“石、煉瓦、木からなる、人や財産の容れもの”として定義されるであろうからである。今、同じようにして「箱」を定義してみる。それは“木の・でできた、容れものである”。つまり「この木」は「この箱」に「これ（であること）」をもたらした後に「木」でなくなる訳ではない。それは、“この、箱” = “この、木でできた容れもの”の説明、認識対象としての普遍的形相・種 ($\tau\epsilon$) の部分として、指示されない質料となって内在することになるのである。そしてそれは定義の中に、類としての資格で、具体的には質料的部分の説明という形をとって、現れる。アリストテレスが類を質料として位置付けるのは正しくこの意味においてである¹⁸⁾。そして類としての質料を彼は「普遍的な質料」($\delta\lambda\eta \acute{\omega}\varsigma \kappa\alpha\theta\acute{\omicron}\lambda\omicron\upsilon$ →01)と呼ぶ。——すなわち次のように理解できるであろう。「この木」として指示された質料は、箱の形相が得られ「この箱」が成立する時、自らの「これ（であること）」を譲り渡すことでそれに「この」箱としての資格を与え、自らは被指示性を解除された普遍的性格「木」として、今度はこの「箱」という普遍的形相（の説明）を成り立たせる際の類となる質料に転ずるのである。かくして“木”(ξύλον) デアル”この木は、“木でできた”(ξύλινος) 容れもの=箱デアル”この箱になったのである¹⁹⁾。

個的質料と種的形相の両者を持っているという事実が、ある1つの個体を個体として存在させる根拠になっているとアリストテレスが考えていることを、既に我々は確かめた。上に見た議論はさらに、個体が成立しているという事情に質料が関与することと形相が関与することとの間には、単

なる2種類の原理の働きの結合以上の、より立ち入った関係が認められることを示唆しているものと言える。すなわち、個的質料による個別化とは、そこから生じたものが「これ」($\tau\acute{o}\delta\epsilon$)として指示可能となる個別性を得る事態であると同時に、当の個的質料が個別性を失うという事態を含んでいるのであるが、その同じ質料は、個体が“「何か」($\tau\epsilon$) デアル”と認識されるための、普遍的性格を持つという事実、言い換えれば説明・定義対象としての種的形相を持つという事実にも、個別性を失うというまさにそのことを通じて関与するものだったのである。つまり、種化に関わる形相がそれを現実に行えるのは、形相そのものの内に「普遍的質料」が内在し、自らが「類の種」として成り立つ限りにおいてなのである。このように見る限り、個別化と種化とは、2つの別個の現象ではなく、むしろ折り込まれた複合的な事態として捉えられるような1つの働きであったと考えなければならないであろう。類としての質料概念が、ここで個的指示と普遍的認識の結節点となっているのである。

4. ま と め

以上見てきたように、アリストテレスが個体 ($\tau\acute{o}\delta\epsilon$ $\tau\epsilon$: これなる何か)として念頭に置くのは、指示によって把握される「この」($\tau\acute{o}\delta\epsilon$)存在であると同時に「何か」($\tau\epsilon$)として認識によって把握される存在でもあるという、2つの側面を持った、現実的な事物の概念であると思われる。そして或る現実的な個体は、可能的には、それを質料としてそこから生ずる他の個体であるとみなされている。今日我々が用いる“個体化”という言葉で示される出来事は、具体的にはこのように、より下位の個体を質料としてそこからより上位の個体が生成していく過程として記述されている。我々

はまず、アリストテレスが生成について述べた記述をもとに、個体が生成するということが（個的）質料と（種的）形相とによって被指示性（個的性格）と可認識性（種としての普遍的性格）をもたらしされることとして捉えられていることを明らかにし、“個体化”とは質料による個別化と形相による種化の2つの働きを含むものであると考えた。そして言表・定義についてのアリストテレスの議論から、この2つの働きが1つの不可分の事態として個体の生成を成り立たせているものであることを認めた。「これなる何か」を個的に存在させることも、普遍的に存在させることも、現実の事態の中では不可分な働きである。そしてこの不可分性は、*τόδες τι* の、概念としての不可分性そのものであると言ってよいであろう。

通常“個体化 *individuation*”という用語は字義通りの意味で、すなわち我々が個体化と呼んだところの働きの意味に事実上制限されて使用され、そのために質料による個体化と形相による個体化という2通りの考え方が読み取れる『形而上学』の記述は古来解釈者を当惑させてきた。しかしもし今、単純に“*τόδες τι* を成り立たせること”として個体化を把握し直しさえすれば、アリストテレスの議論中の2つの観点が個体化理論における一貫性の欠如の結果として捉えられる必要はなくなるであろう。この主題をめぐる議論の不都合はむしろ、*individuum* という言葉が *τόδες τι* を意味するのに十分でなく、その存在論的地位の一方を不可避的に覆い隠してしまうという事実の方にあるのではないかと思われる。

注

- 1) 既にこの段階で明らかなように、この主題は多少言語化しにくい性格を持っている。筆者は、*τόδες* を *individual* なものとみなす用語の理解を覆そうとは思わないが、*τόδες τι* と *τόδες* を同一視する解釈は性急に過ぎるのではないかと考える。従って *τόδες τι* とは以下 *individuum*+ α として捉えられている。た

だ本文中ではこれを指す場合も「個体」という日本語を便宜上用いているので、結果として議論にまぎらわしい部分が生じたかもしれない。このことは自覚しているし、批判は承知の上である。いずれにしろ以下では $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota = \tau\acute{o}\delta\epsilon$ (=an individual) という解釈をとる Ross の見解 (v. W.D. Ross, *Aristotle's Metaphysics, text and comm.* Oxford, 1924, I, p. 247, II, p. 159) に従っていない訳である。そこで Ross 解釈を否定する根拠が以下十分に述べられていないという批判が予想されるが、Ross の根拠自体がそれほど決定的なものとは思われない上、 $\tau\iota$ が《a》に相当するとしながら $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ と $\tau\acute{o}\delta\epsilon$ を区別しない (interchangeable) など厳密さを欠く面があり、論理的な批判そのものがしにくいので、そのために紙面を費やすことは避けた。むしろこの語の解釈をめぐるには別に議論の機会を設けた方がいいと思っている。話が前後するとその非難は覚悟の上である。尚、Ross の解釈は近年 Dumoulin によって直接批判された (B. Dumoulin, *Analyse génétique de la Métaphysique d'Aristote*, Les Belles Lettres, 1986, p. 195-6)。Dumoulin は Ross の考えるような $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ の「通常の」意味とは別に spécifique な意味が存在することに注意を促している。ただもちろん Dumoulin の場合は $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ を複数の要素の結合と考えているのではなく、individualité の意味を場合に応じて区別することの必要性を指摘しているのである。注 7 参照。

- 2) b30 $\acute{o}\varsigma\ \kappa\alpha\theta\acute{o}\lambda\omicron\nu$ の掛かり方については Ross に従わない。v. Ross, op. cit., p. 199 et J. Tricot, *Aristote, La Métaphysique, texte note*, nouv. éd., Vrin, 1966, p. 406, note 4.
- 3) 個体化の質料を指すのに用いられた *materia signata* という表現からも、それは明らかである。Thomas は個的質料を「次元によって」すなわち空間的に指示・指定された質料とみなした。つまり質料のこのような性格がもたらす個性性は空間的な被指示性と解釈されていたといってよい。次元 (*tres dimensiones*) による *designatio* という考え方の元型は Boetius に遡り、後に Avicenna を経て Thomas に受け継がれたと考えられている。v. M.-D. Roland-Gosselin, *Le "De Ente et Essentia" de S. Thomas d' Aquin*, Vrin, 1948, Etude I. *Le Principe de l'Individualité*, p. 57 sqq.
- 4) 我々はこの理解で文意は通ると判断する。v. Dumoulin, op. cit., p. 306.
- 5) Ross は Thomist とは異なり、個的質料を性質的に限定された質料と考え、個的質料を限定する形相として個体形相 individual form. の存在を仮定した上で、06 をこのように解釈しようとする。v. Ross, op. cit., Comm., I, p. cxix, cxxiv, 批判については v. 前注 Dumoulin。

- 6) v. 前注 Ross, Comm.
- 7) 種・形相がしばしば $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\epsilon$ と呼ばれることの意味も、このような事情を念頭において理解すべきなのであろう (v. D, 8, 1017b25)。Ross は形相が *the element that gives individual character* であるという意味で $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\epsilon$ と呼ばれるとの解釈をとる Ross, op. cit., I, p. 310 et v. Comm., I, p. cxviii)。Tricot は、*«τὸδε τε est la forme ou essence à laquelle il ne manque que d'être réalisée dans une matière pour devenir un individu réel.»* と説明している (Tricot, op. cit., p. 161)。しかし Dumoulin (v. 注1) はこれを、*individualité* に認められる種的な側面 (*d'ordre spécifique*) が『形而上学』とりわけ Z では前面に押し出されているとする自らの主張と関連づけている。
- 8) 以上のように考えることで、*De Anima* 中の次の記述についても理解する事が可能になる。
- 存在するものの内の或る種類は実体であると私は言う。ところで実体にはまず、質料としてあるもの、すなわちそれ自らはこれなる何か ($\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\epsilon$ でないもの、次に、それによって、既に [在るものが] これなる何かと言われるところ (*καθ' ἣν ἦδη λέγεται τὸδε τε*) の形態すなわち形相、第三にこれら両者からなるもの、がある。(De An., 412a6-)
- 質料によってこの ($\tau\acute{o}\delta\epsilon$) 個体となっている事物が $\tau\epsilon$ と述べられることを可能にしているのは形相との結びつきだということである。「形相によって $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\epsilon$ と言われる」事の意味を形相による個体化に関係づけて考える (v. Ross, op. cit., Comm, I, p. cxvii) 必要はないであろう。
- 9) Z, 3, 1029a7 sqq.
- 10) *ibid.*, 1029a27.
- 11) Ross, op. cit., II, p. 227.
- 12) M.L. Gill, *Aristotle on Substance*, Princeton, 1991, p. 86 sqq.
- 13) H, 5, 1044b29 sqq.
- 14) ここでは「火」がそのようなものとして挙げられているが、もちろん「火」は完全に無規定な質料ではなく、絶対的に第一なのではない。v. Ross, op. cit., II, p. 256, Tricot, op. cit., p. 506.
- 15) *οὐ τὸδε τε οὐσα*, Jaeger.
- 16) 当然 a32 以下 (→11) に関する Ross の解釈の裏には、この箇所との矛盾を避ける意図があったと思われる。
- 17) Z, 7, 1033a5 sqq.

- 18) 類が質料として *ὡς ἕλη* あるものと直接述べられるのは Z, 12, 1038a6 である。その意味については H, 2 の他に 6 を参照。
- 19) Z, 10 以下で定義の問題を論ずる時、アリストテレスがモデルとして示すのは主に人間=*ζῶον δίπουν* の例である。この場合人間の生成の質料が生成過程の前後で変化〔月経血 (*καταμύμια* H, 4) →骨, 肉〕する点に注意は必要であるものの、それらはいずれも「最も近い質料」であり、その違った姿を表しているにすぎないのだから、人間の例についても、これまでと同じ議論を適用して考えることは可能〔これなる・月経血→これなる・二本足の、骨や肉からなるもの(動物)=人間〕なのだが、煩雑なことと、また特に、原文中の何箇所かに見出されるこれとは別の視点、すなわち〔人間=魂+肉体〕との関係が明らかでないこと、具体的には、魂としての *εἶδος* (肉体(質料)とは別の) と、定義対象としての *εἶδος* [普遍的質料+普遍的説明(種差)] との関係が明らかでないことから、混乱を避けてここではあえて触れなかった。後者は中世の解釈者たちも困難を認めていた点である。原因はもちろん *εἶδος* という語のもつ多義性であり、たとえば Averoes はそれを質料に対する形相の意味で、また Avicenna およびそれに与する Thomas は種ないし本質の意味でとらえるべきとし、実際そのように訳すが、明らかに Z, 10 以降では両者いずれの意味においても *εἶδος* の語が用いられており、どちらの解釈も一貫しない。この件については更に v. Dumoulin, op. cit., p. 229 sq.。また Scotus が、アリストテレスの思考に一貫性の欠如を認めた上で、表向きの問題を処理するために、いわゆる「全体形相」と「部分形相」の概念を導入したことについては、v. Ross, op. cit., Comm. I, p. civ。

La Théorie de l'individu selon Aristote
—Sur l'《individuation》 dans la *Métaphysique*—

Takehiko IWAMURA

Dans l'histoire de l'aristotélisme, les avis des commentateurs se sont partagés sur le problème de savoir si c'est par la forme ou par la matière que l'individuation des choses s'opère. Ces deux opinions se trouvent en effet dans le texte même de la *Métaphysique*, dont on fait encore aujourd'hui remarquer le manque de cohérence, mais il est possible d'éviter la contradiction si l'on interprète le caractère de l'individu comme suit.

Aristote affirme que la chose produite doit être saisie d'une double façon : par la désignation, d'une part, et par la connaissance, de l'autre (*τόδε τοιόνδε* Métaph., Z, 8, 1033b21) ; ce qui signifie que l'individu (*τόδε τι*) n'est pas seulement un être particulier équivalent à un *τόδε* isolé (comme le pense Ross), mais qu'accompagné aussi de quelque caractère universel (*τι*), il forme un cocept composé de deux éléments : un «ce quelconque». Or puisque ces deux attributions sont affectées à l'individu respectivement selon la matière et selon la forme, l'individu proprement dit (*τόδε τι*) doit nécessairement avoir sa source à la fois dans la matière qui le rend désignable comme un être particulier (*individuum*), et dans la forme par laquelle il est déterminé spécifiquement comme un être connaissable. Les deux contextes dans lesquels se trouve l'argumentation d'Aristote ne sont donc pas incompatibles.

Or, la matière qui prête particularité à un individu, est aussi un *τόδε τι* elle-même ; ainsi, le bois qui est la matière de «ce coffret» est lui-même un être en acte qui s'est produit comme «ce bois-là» à partir de sa matière immédiate, la terre (v. Θ, 7, 1049a18) ; c'est à dire qu' un individu inférieur qui existe déjà en acte est en même temps, un individu supérieur en puissance, en tant qu'il est la matière de celui-ci («ce coffret») se produit à partir de «ce bois». Dans le processus de la production, la matière inférieur, déjà désignée, particularise l'individu supérieur en lui transmettant sa propre désignabilité, tandis qu'elle-même, en tant que caractère universel dépourvu de particularité (matière comme genre Z, 12, 1038a6), intervient dans l'énonciation générale de cet individu supérieur, à savoir, sa définition («le coffret» est un récipient «en bois»). Nous constatons ici que l'individuation (prise au sens littéral du terme) et la spécification sont toujours inséparables dans la génération de la substance, et cela confirme notre interprétation de la dualité des aspects du *τόδε τι*.

Il n'est donc pas besoin de trouver une contradiction à l'intérieur de la théorie d'Aristote sur l'«individuation», à condition de prendre ce mot au sens de «formation du *τόδε τι*». La difficulté du problème dans la controverse traditionnelle semble plutôt tenir au fait que le mot *individuum* ne convient qu'imparfaitement pour désigner le *τόδε τι*, et qu'il occulte inévitablement l'un des deux statuts ontologiques de celui-ci.

(学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程, 哲学専攻)